



理科教育助成被災地復興支援対象校訪問

珠洲市立直小学校



珠洲市立直小学校は、市中央部にある全校児童62人の学校。震災当初、体育館は被災された方々の避難所となりました。いままぐらうんどは仮設住宅の場所となっています。訪問日、「多大なるご支援に心より感謝しております」という手書メッセージつきの案内板で迎えてくださいました。

お昼前の4時間目。5年生9人が、門前幸一教諭による「メダカのたんじょう」の授業にのぞみます。「いまから4時間目の授業を始めます」

「始めます！」という大きな声のあいさつで始まりました。門前教諭からの「子どもを誕生させるために、オスとメスは要るかな」との問いかけに、子どもたちは、一人ひとりが「いる！」「メスだけでいいかも…」「人間と魚っていっしょなん」などと思い思いに予想していきます。そして、



水槽に入っているメダカたちをいろいろな角度から観察し、これまでに習った雌雄の見分け方を活かして「オスは4体、メスは1体」などと発表していききました。「このあと、どうなっていくといいか、理想を動画で見えます」との門前教諭からの声かけに、子どもたちは液晶テレビの動画教材に目を向け、オスとメスがいっしょになって受精し、産卵するようすを見ました。その後、一人ずつが「マイ水槽」でオスとメス

を飼い、産卵を迎えられるように準備しました。メダカに空気をあたえる「水草もどき」の使い方をあらかじめ習っていた児童が、「半分に切って、巻いていって、穴にさしこんで、広げて完成です」と実技も示しながら、クラスメイトたちに伝えていました。ふりかえりでは、「オスとメスの見分けがむずかしかった」「つぎの時間は卵が生まれるようにしていきたいです」などと感想を伝えあい、みんな拍手をしていました。

門前教諭に「テレビ、水槽、入れものなど、日産財団様からの助成で授業することができました」と紹介をいただき、日産財団スタッフが「オスかなメスかなと活発に話をされていていいなって思いました。これからも、『おもしろい』『なんだろう』という気持ちを大切にしてください」とあいさつ。子どもたちから大きな声で「ありがとうございました！」と、お礼をいただきました。



校長の道端専次先生にお話をお聞きしました。

——震災前後での学校現場の変化はどういったものでしたか。

地震の影響は、決して小さなものではありませんでした。震災前後でかわってしまった部分もあります。しかし、学習環境面については、日産財団様をはじめ、全国より多くのご支援をいただき、以前と変わらぬ教育を提供できているものと思っています。

——震災後、学校としてどんなことに注力されてきましたか。

子どもたちの心のケア、これに尽きます。私どもにはその経験がなく、手探りの部分がありました。兵庫県の震災・学校支援チーム「EARTH」様をはじめ多くの支援者から知見や情報をいただい、それらを活用しながら子どもたちのケアを進められています。

——子どもたちのケアとは、言葉にするとどういったものでしょうか。

大切にしているのは、子どもたちを笑顔にすることです。この一点で、取り組んできました。

——震災前からされてきたことを続けていくという点では、どう取り組まれていますか。

ここは地域の結びつきがとても強いところです。本校でも、震災前より地域の方々とともに取り組んできた行事が多くありました。「田植え唄」とともに古式ゆかしき格好での「田植え体験」はそのひとつです。こうした地域の方々と共におこなう行事を、これからも可能なかぎり続けていくことが大事だと思っています。

——読者のみなさんにメッセージをお願いできますか。

「かならず道はある」ということを伝えたいと思います。正直つらい時期もありましたが、なにかしら乗り越える方法があり、助けてくれる人がいらっしゃり、道が開けると身をもって感じました。子どもたちの笑顔のため、これからも学校のみんが元気でありたいと思っています。

【事業紹介】
理科教育助成被災地復興支援

令和6（2024）年1月に発生した能登半島地震の被災地に対し、日産財団は、学校をはじめとする地域の復興を支援するため緊急資金援助を行いました。石川県珠洲市・輪島市・能登町・穴水町に所在する小中学校全28校を対象に総額2,000万円の助成金を贈り、理科教育をはじめとする学校教育活動の復興に役立てていただいています。